

「千里山の地名について」補遺 十五回生 伊藤(山崎)發子

千里山会誌十八号に「千里」は古くは、「ちさと」と訓むと書きました。その後、豊中市在住の私の旧友が吹田市立千里山・佐井寺図書館(ちさと)に出向いて調べてくれました。それによると、

「吹田市に合併する前の千里村はちさとむらと訓み、村内の千里山に因む」とあり、併せて川の名前を挙げています*次々ページ「千里川の名称あれこれ」参照。それから類推すると今も豊中市北部を流れる川は昔から今日迄「せんり川」と言っていることが判りました。

同図書館所蔵の「摂津名所図会」は京都の町人吉野屋為八が計画。九卷十二冊で一七九六(寛政八年)から二年かけて刊行された。千里山に関する巻は第五巻島下郡にある、それを参考にして書かれたと思われるウイキペディアの「千里丘陵」の項目には以下のように記されている。

明治期に町村制の施行によりほぼ現在に近い名の各村が発足した。21村が記されている。千里村、片山村、佐井寺村、吹田村、山田村、岸部村など。吹田村については以下のように説明されている。吹田市の地形は標高10mほどの安威川、神崎川沿い

の平野と、標高20m〜100mに及ぶ千里丘陵の二つによって構成される。丘陵の端部では弥生時代の集落跡が見つかっており、また飛鳥時代から奈良時代にかけては自然条件を生かして須恵器や瓦などの窯が作られ、焼成され、瓦は難波宮などの造営に使われた。

千里丘陵は北摂地域にあり、大阪平野から見ると高台に当り、石器時代からの多数の遺跡がある。古代は大阪平野の大半が大阪湾や河内湖だったため千里丘陵のすぐ下は海や湖の岸辺に当り、小さな港がたくさん作られ栄えていた(高浜、豊津など)。千里丘陵は府内でも数少ない竹林の多い地区でもあった。山田川、糸田川、正雀川など短い川の源流となっているが、どの川も短小で流量が少なく、農業のため古くから多くのため池が点在している。

一九二一年に千里山へ北大阪電気鉄道(のちの阪急千里山線)が十三から延び、大阪の郊外住宅地や別荘地として戦前から開発が進んだ。

とある。そういえば千里山線の淡路の地名は昔原道真の勘違いから名付けられたといわれている。道真が太宰府に左遷される途次、京から淀川を下って一旦上陸した際「ここは淡路島か」と尋ねられた由。現在の淡路の駅のあたりは海のように見えたのであろう。しかしこの一言で地名を淡路としたのは、道真への同情が庶

千里川の名称あれこれ

出典 吹田郷土史裏街道

桜井谷関係の地元側文書で「千里山」の名称が乏しいのに反して、千里川については、多くの用例を見ることが出来る(太字は桜井谷で作成された文書)。

| 年/月 | | 表記 | 文書 | 作成主体 | 出典 |
|---------|------|-------------|----------------|---------|----------|
| 1659/3 | 万治2 | 山川 | 原田郷新免村水論 | 原田郷六ヶ村 | 豊中市史史料篇三 |
| 1670 | 寛文10 | 桜井谷川 | 山地境界詳論 裁断地図 | 桜井谷六ヶ村 | 桜井谷郷土史 |
| 1738/6 | 元文3 | せんり川 仙路川 | 桜井谷新免村水論 | 桜井谷六ヶ村 | 豊中市史史料篇三 |
| 1738 | 元文3 | 千里川 | 同上和談証文下書 | 桜井谷六ヶ村 | 豊中市史史料篇三 |
| | | 千里川 | 御達書控 | 代官所 | 豊中市史史料篇三 |
| 1745/9 | 延享2 | 仙路川 | 指出明細帳 | 柴原 | 村明細帳(上) |
| 1756/3 | 宝暦6 | 千里山川 | 諸色附込帳 | 原田 | 村明細帳(上) |
| 1756/4 | 宝暦6 | 千路川 | 桜井千路川幅改帳 | 桜井谷六ヶ村 | 桜井谷郷土史 |
| 1757 | 宝暦7 | 仙路川 | 永代鑑 | 桜塚 | 村明細帳(下) |
| 1758/3 | 宝暦8 | 千里川 | 明細帳 | 新免・轟木 | 村明細帳(上) |
| 1759/6 | 宝暦9 | 千里川 | 小物成場所 山林之儀 | 桜井谷六ヶ村 | 豊中市史史料篇三 |
| 1759 | 宝暦9 | 桜井川 | 開方小物成 検地地図 | 桜井谷六ヶ村 | 桜井谷郷土史 |
| 1766 | 明和3 | 千里川 | 開方小物成 検地地図 | 桜井谷六ヶ村 | 桜井谷郷土史 |
| 1778/7 | 安永7 | 千路川 | 初而用水出入 | 南刀根山・柴原 | 豊中市史史料篇三 |
| 1778 | 安永7 | 仙路川 | 同上返答書 | 小路・内田 | 豊中市史史料篇三 |
| 1778 | 安永7 | 仙路川 | 同上和睦届 | 上記4村 | 豊中市史史料篇三 |
| 1824 | 文政7 | 千里川 千里山川 | 四株指出明細帳 | 原田 | 村明細帳(上) |
| 1828 | 文政11 | 千里川 | 明細帳 | 原田 | 村明細帳(上) |
| 1831/3 | 天保2 | 千里山川 千里川 | 四株指出明細帳 | 原田 | 村明細帳(上) |
| 1832/2 | 天保3 | 仙路川 | 明細帳 | 桜塚 | 村明細帳(下) |
| 1832/3 | 天保3 | 仙里川 仙路川 | 村鑑明細帳 | 野畑 | 村明細帳(上) |
| 1843/7 | 天保14 | 千里川 | 明細帳 | 南刀根山 | 村明細帳(上) |
| 1843/+9 | 天保14 | 千里川 千里山川 | 明細帳 | 原田梨井 | 村明細帳(上) |
| 1868/4 | 慶応4 | 仙路川 | 明細書揚帳 | 桜塚 | 村明細帳(下) |

この表から、桜井谷(および桜塚)で「せんり川」「せんじ川」の二つが並び行われていたことが判る。これに、原田郷で多用される「せんりやま川」、摂津国古写図の「せんじやま川」を加え、更に「摂津名所図会」の「ちさと川」を含めると5種類の变化がある。

民の間にも浸透していたのだと思われる。

「二〇〇年ほど前には生駒山から広がる大阪平野は河内湖と呼ばれる大きな湖の底にあった」、「天満も梅田も軟弱な土砂層にあって波に洗われていた」、「長い年月の間に淀川と大和川から流れ込む膨大な土砂が、次第に孤立した沼や湿地帯へと姿を変えていき、肥沃な平野につくりかえていった」、「江戸初期梅田は泥田を埋め立てて田畑を開いたことから「埋田」と呼ばれていた」。(阪急沿線謎解き散歩「新人物文庫 2013・8」とある。

ところで冒頭の「せんり川」の古文書に表れた呼称を一表にまとめたものを見つけました(次ページ参照)。表中の川の名を見ると「ちさと」と読める名はない(例外として脚注にある「摂津名所図会」の「ちさと川」があるのみ)。北大阪電気鉄道が地名を川の名「せんり」から取ったとしか思われない。如何であろうか。

二〇一五年二月十九日NHKの「にっぽん紀行大阪」の番組で「千里川」が放映された。伊丹空港の長いフェンスに沿って巾3mほどの草に覆われた川が千里川である。フェンスと川の間には巾4mほどの道が続いており川からは3、4mほどの高さがある。この道は昔、洪水予防のために作られた土堤が踏み固められ、



道になったのだそうである。この土堤には数十人の人が集まってカメラを構えたり、全員が空を仰いでいる。この道は空港の滑走路に直角に對して、空港への着陸体制に入り、低空飛行している飛行機の腹側がくつきりと見え、すごい爆音だそうで、皆、キャー、コワイ!と叫びながらスリルを味わっているらしい。この見物人たちは毎日来る人も多く、この場で親しくなったと言っていた。

この道路は少し上流で能勢街道と交差している。

日本の幹線道路はすべて東西に延びている。が庶民の生活のために街道が設けられた。主として日本海から太平洋または瀬戸内海へ出るための「公用の主要道路」(広辞苑)を街道という。必ずしも海とは関係のない街道もある。江戸時代からは五街道(日光街道など)が作られた。しかしもともと庶民の生活の必要から生まれたのが街道で、土地の名が付いた若狭街道や運ばれる物資に因む塩街道、鯖街道がある。ほとんどが、険しい山道を越えなければならぬ。

千里山近辺にも五街道に次いで重要な西国街道の他吹田街道、箕面街道などがあつた。

「豊中歴史・文化財ガイドマップ」(平成二〇年八月)には次のように書かれている。

かと考えている。

*「阪急沿線謎解き散歩」P.179

当時は大阪の鬼門に当たるとして未開発であつた千里山……

*千里山開発物語(一)

北大阪電気鉄道株式会社より大正四年九月に、大阪天神橋筋六丁目市電終点を起点とし、柴島、吹田、垂水を経て千里村佐井寺に至る、電気動力の軽便鉄道の敷設の免許申請が出され、大正五年9月1日に免許を受けた。免許を受けると同時に、垂水より佐井寺へかけての丘陵地の買収にかかり、垂水地区では住宅地用として八万七千坪、終点にあたる佐井寺地域約十萬坪は墓地、火葬場並びに葬儀所を新設するという事で買収した。これは大阪市民の墓地公園を造る計画であつて、大正7年5月には墓地、火葬場、葬儀所の認可を受けたので……

終点駅「千里山」は佐井寺から1軒程離れた1軒の家もない山の中に造られたので、村名の千里村の千里をとり、之に山をつけて「千里山」と名付けた。

「阪急沿線の不思議と謎」(実業之日本社 2015・4)による

「千里」という文字が行政地名として現れるのは

三叉路に立つこの道標は(高川―豊中市と吹田市の境界を流れる天井川の下を通るトンネルの傍にある)、吹田街道や天神橋方面から三国街道(碓氷峠を通る道とは全く別、十三から宝塚線で次の駅三国と関係あると思います、三国街道は神崎の渡しがあり能勢街道に通じる重要な街道だったようです)往来するひとびとに、池田、箕面方面への道筋を示しています。吹田街道は服部天神宮付近で能勢街道から分岐し、吹田市南部をほぼ東西に循環し、南高浜町で亀岡街道に合流するまでの道筋を呼んでおり、年貢米や農産物の運搬、社寺参詣などに利用されました。

とある。この辺りの主な街道は能勢街道であつた。能勢には妙見さんがあり、参詣者が多く利用したのであろう。そのため千里川は現在よりも巾広く深く、洪水を起す程の川だつたと思われる。千里川は箕面山中を源流とし、大阪国際空港の南側を通り、最終的に猪名川に合流します。昔は水利的にも重要で水争いもあつたそうです。

それにしても、千里丘陵がなぜ街道に利用されなかつたのでしょうか。一説によると千里丘陵は大阪の鬼門に当たるとかで敬遠されたといわれる*。私はキリシタンの隠れ場所としてにらまれていたのではない

明治時代に入ってからで、一八八九年(明治22)、佐井寺村と片山村が合併し、ちより千里村が誕生した。

その千里村に初めて鉄道が通つたのは一九二一年(大正一〇年)一〇月二六日のことである。北大阪電気鉄道が千里丘陵の住宅開発に伴つて千里線を敷設し、その終点駅を千里山駅とした。ここに「千里」ではなく「千里」の名が一般化したのである。(中略)一九三一(昭和六年)、千里村の村会で「おおせんりやま大字千里山」という地名への改称が決議された。ここに山はないものの、正式な地名としての「せんりやま」が誕生したのである。

とある。古代から千里山周辺の地は佐井寺村、山田村など交通の要衝であつたことは推察できる。西国から京へ上るには必ず摂津国を通らなければならぬ。大阪からまっすぐに京都へ行けるのではなく、摂津を軸にして曲がりくねっている。この間に高い山があるわけではない。どうも千里丘陵を避けているとしか思えない、山田村、上新田を除いて千里丘陵は水の便が悪く痩せ地のため雑木林がある程度で、人家などはなく街道が出来なかつたのかもしれない。千里村よりはせりり川の方が名が通つていたに違いない。北大阪電気鉄道が、何のいわれもないのに千里山と命名するはずはない、と思われる。

完